

私は1968年に羽田空港に乗り入れていたパン・アメリカン航空会社に入社しました。そのころはまだ今日のように誰もが英語を身近に感じているころと違い、職業的に使いこなす人は今日ほど多くはありませんでした。その後40年近く航空会社で働きました。途中でユナイテッド航空に変わりましたが、その前に家族の要望があって羽田から伊丹に移住しました。

私が「生きた英語」と出あったのは幼少のころ、横浜市内に住んでいたんですが、家の近くにカナダ人夫妻が運営していたキリスト教会があり、そこへよく兄弟姉妹そろって出かけたことが最初でした。勢い英語にはまっっていくことになりました。

後年、その英語がどうも気に入らないと思うようになりました。それは文章があまりに粗雑と言いますか、不親切だと感じるようになったからです。英語を母語にしているいわゆるネイティブの人々は文章に発音という大きな媒体を介在させているわけで、文章は発音して初めて意味を伝える言語となりうるのです。どの言語もそうですが、その点日本語は発音はそれほど重大な位置を占めないわけですから、黙読も音を媒体にせずにも目だけで素早く読み進むことができます。これがマンガ脳ということにもつながります。

そこで私は縦の文章と横の文章を読むうえで視覚的感覚の違いがどうなのかを調べてみました。欧米の研究者はほとんど縦の文章は研究材料が乏しくいい結果が得られていないようです。横の欧文を無理に90度回転させて縦の文章として実験している様は滑稽ですらあります。中国人研究者でさえ、「縦に書く習慣はもう古くて、日本ぐらいなもの。いずれ日本もその習慣は横になるでしょう」と書いています。

私の英文への懐疑的心境はその後大阪外国語大学の英語科に足を運ぶこととなりました。じっくりアカデミックに考えてみようと思ったわけです。5年間にいい視点も身に着きました。

しかしながら、ヨーロッパ言語は、教育の場では縦にしてみよう、などという発想は邪道も邪道、ふざけた戯言でしかありません。専門家や学者、先生方は例外なく英文はこういう形でなければならぬのであります。読みにくい形かどうかではなく、読まねばならない覚悟ができているかの信念が古来より英語関係者には生き続けている現状です。

結局、辿りついたところが今回発表した「そろばん式英文」とでも言いましょうか、発音によらず、単語の位置から視覚的に意味を掴む方法でした。それを英語のふるさと、イギリスで出版したものです。東洋文化の輝く一面として取り上げてみたかった思いがあります。

日本では英文解釈は昔から英文の上を行ったり来たりして文を解体しながら訳します。

「UMAMI ENGLISH」はそれをコンパクトな図式にして、縦長に並べ、一気に解読できるというものです。